

タイトル	ニーチェ哲学の相反する思想について
著者	瀬川, 修二; SEGAWA, Shuji
引用	北海学園大学学園論集(158): 19-26
発行日	2013-12-25

ニーチェ哲学の相反する思想について

瀬 川 修 二

ニーチェの哲学を全体的に見ると多くの相反する思想が支配している。『悲劇の誕生』では芸術が賛美され、他方、学問は否定的な評価を受けるが、『人間的あまりに人間的』では芸術は否定され、学問が肯定される。「力への意志」と「永劫回帰」の思想も前者に自由意志、後者に必然性を想定するならば、相反する思想である。一つの思想、見方は排他的に絶対化されることなく、それを否定する見方が見出される。ニーチェのこの相反する思想に対して一貫性に欠けていると批判することは間違っている。むしろ、その矛盾性、二律背反こそが彼の哲学の本質を形成していると考えべきである¹⁾。この矛盾性をニーチェ哲学の具体的思想を通して検討してゆきたい。

1. パースペクティブ主義とその否定

「人生像——人生像を描くという課題は何度も作家や哲学者に立てられたにせよ、やはり無意味である。どんな偉大な画家、思想家の手の下でも常に一つの人生から、つまり彼らの人生から取り出した絵や小画しか出来上がらなかった。またそれ以外の像は実際、不可能なのである。生成変化するものの中では生成変化するものは確固たる永続的なものとして、〈これ〉というものとして映し出されることは不可能だ。」²⁾

ニーチェはここでまず最初に我々の描く人生像は結局、我々の限られた一つの人生から生み出された個別的な像でしかないことを強調している。我々は我々自身の人生しか生きることが出来ないことを考えれば、この考えは当たり前のことを言っているように見えるが、しかし、この考えはニーチェの哲学の中心的思想であるパースペクティブ主義につながっている。パースペクティブ主義は絵画の表現技法として遠近法主義と訳されるが哲学の認識方法に関しては我々の世界認識は我々の人生像と同じく、その時々を観察者の限られた観点から生まれるものであり、個別的、相対的なものに過ぎないことを意味している。我々の経験する世界は狭く限られており、その限られた世界での我々の見方も限られている。我々はそのつど限定された立場から、同時に我々の欲求、利害、先入観などを通して人生像を描き、世界を見ているのであり、それは決して人生、世界の客観的認識には達せず、自分勝手な主観的、相対的解釈にならざるをえないのである³⁾。

ニーチェはここで更に、我々自身の生成変化、世界の生成変化にも言及している。我々の人生、

世界が常に動き、変化している限り、不変の永遠の存在、永遠の真理、価値を想定することは不可能であり、我々の認識、感情、思想も一時的で仮のものになり、変化せざるを得ない。

ニーチェの考えによれば、世界はもともと目的も意味もなく、混沌としたものであり、我々はこの世界に秩序、論理、形式を勝手に押し付け、捏造し、都合の良いように解釈してきたのである⁴⁾。世界と我々自身が変化、生成し、我々の認識が限定され、主観的、相対的、一時的なものにならざるを得ないとすれば、当然のことながら、それを超越する何か不変で、絶対的なもの、疑うことの出来ない確実なものを想定する試みがなされるだろう。それがまさしく形而上学である。形而上学は我々の経験する世界を現象、見かけの世界と考え、その背後に本質、実在の世界を想定する。プラトンは我々の経験する世界の背後に真の実在(イデア)の世界を想定したがニーチェはそれを形而上学として厳しく批判する。我々が経験する世界の客観的、普遍的真理を認識することは不可能であるにせよ、それ以外の世界は存在しないのである。形而上学のみならず、善悪、キリスト教の神など、その絶対的価値設定の基盤は疑われ、普遍性を持たない限定された世界解釈として徹底した批判にさらされる。

「あらゆる人物、あらゆる事柄には賛成できる面と同様、反対される面があること、あらゆる事柄は二面的だけではなく、三面的、多面的であることを考えると、このような突然の判断で全く間違ふことはほとんど難しいことである。」⁵⁾

ここでニーチェは女性の唐突の主観的判断(インスピレーション)について述べ、その偏見性にもかかわらず、なぜ、それが正しいとみなされるかの理由を述べている。パースペクティブ主義においては主体としての人間の対象認識が単なる限定的、主観的解釈にすぎないことが強調されるが、ここでは対象世界そのものの複雑さ、多義性が問題になっている。人間、物事はけっして単に一面的な性格を持つものではなく、さまざまな側面があり、その多面性が相反する見方を許容するのである。ニーチェのパースペクティブ主義は我々の物の認識、見方が制限されており、単なる相対的解釈にすぎないことを意味しているが、それは同時に絶対的、一面的認識を否定し、多様な、相反する見方の必然性をも含んでいる。世界は多義的、多面的なものであり、その上、世界が常に変化し、我々自身も変化している限り、様々な異なった解釈、見方が生まれるのはむしろ、当然であると言えるだろう。

ニーチェの著作の表現形式、つまりアフォリズム形式や、『ツァラトゥストラ』の文学様式は物事を一つの観点から体系的に捉えるのではなく、様々な視点、観点から世界の多様性を認識する試みであると考えられる。

しかし、ニーチェはパースペクティブ主義の立場から我々の認識が主観的、相対的解釈にならざるを得ないことを強調しながら、他方、「力への意志」や「永劫回帰」の思想によって、世界を究極の原理によって説明しようとしたことは否定できない。これはニーチェがまさしく激しく批判した形而上学と同じものになり、パースペクティブ主義と相反する思想である。ニーチェがパースペクティブ主義の相対主義に耐えられず、最終的には何か絶対的原理、思想によって世界を根

拠づけようとしたことは確かである。あるいはパースペクティブ主義という思想自体がパースペクティブ主義によって相対化され、それと相反し、対極に位置する絶対的思想が提示されているとも考えられる。そのとき、パースペクティブ主義の立場から、パースペクティブ主義が否定されているのである。いわば、メタ・パースペクティブ主義の立場である⁶⁾。すべてが相対的なものであり、単なる解釈であるというパースペクティブ主義が否定され、すべては「力への意志」という形而上学的絶対原理によって世界は説明されうると信じられるのである。絶対的、普遍的な真理は存在しないというパースペクティブ主義の思想と同時にそれを超えた絶対的、普遍的な真理を求める意志が同時に存在しているのである。それは決して矛盾するものではなく、両立し、まさにそこに物事の多面性と同一ように人間の多面性、真実があるのである。

2. 必然性と自由意志

「滝のほとりで——滝をながめていると、我々は波の無限の屈折、うねり、しぶきに意志の自由と気ままを見るように思う。しかし、すべては必然的なのだ。すべての動きは数学的に計算可能なのだ。人間の行動も同じである。」⁷⁾

ここでニーチェは人間の意志の自由を否定し、必然性を強調しているが、彼の世界観を考える時、自由意志と必然性の考えはそれほど単純ではない。人間は自由意志によって自ら、能動的に、自発的に、内発的に行動するのか、あるいは外部（内部）の要因によって必然的に動かされる存在なのか？この問題はニーチェにおいてのみならず、永遠の問題であるが、「力への意志」や「超人思想」は自由意志を前提としており、「永劫回帰」は必然性の思想である。意志の自由が否定され、すべてが必然的であるとするならば、人間の行動に対する批判、また、キリスト教に対する批判も本来、不可能になるはずである。なぜなら人間に対する批判は意志の自由を前提として初めて可能なものであり、自然界の必然的成り行きを批判することが不可能であるように人間、人間の行動、歴史を必然的と考えたとそれを批判することはできなくなる。当然、超人思想も自由意志を前提にして可能であり、人間の必然性を考えると不可能になる。ニーチェが人間の自由意志を否定した理由の一つとして伝統的人間観の批判がある。つまり人間を精神的、主体的、意識的、合理的、理性的な自由な存在としてとらえるのではなく、むしろ本能、衝動、欲望、無意識、非合理性、非論理性に動かされる必然的存在としてとらえようとしたのである。

ニーチェの自由意志と必然性に対する関係はダーウィニズムに対する評価に如実に表れている。ニーチェのダーウィニズムに対する態度は微妙である⁸⁾。

ダーウィンの進化論は種の生存を適応という外部要因（必然性）によって説明し、環境に適応できたものが生き延び、環境に適応できないものは滅びたという自然淘汰の考えを提唱した。しかし、ニーチェによれば、種は、特に人間は単に環境に受動的に適応し、生き延びるのではなく、自己の力を増大し、より高いものをめざし、自分を超越しようとするものである。これこそ彼の「力への意志」、「超人」の思想である。ダーウィニズムに従えば、最終的に強いものが残るはずであ

るが、現在は強いものだけが生きている世界ではない、中庸のもの、中庸以下のものが大部分をしめているのではないか？進化に関しても人間は別な種、他の動物へ進化していないではないか？とニーチェは疑問を呈する⁹⁾。

ニーチェはダーウィニズムに暗示されている進歩という考えも批判し、生の原理を「生存競争」ではなく、「力への意志」の中に見ようとした。ダーウィニズムは種や多数を優遇したが、ニーチェは優れた幸運例や例外に共感した。しかし、いずれにせよ、人間存在が不動で不変のものではなく、生成するものとして、環境の影響を受けながら進化した存在であることについてニーチェはダーウィンに賛同できたが、人間の力への意志が顧慮されていないことに不満であった。つまり、人間存在が淘汰という自然の必然的原理で説明されたことに対する賛同と拒否が見られる。ニーチェの主な批判はダーウィニズムに含まれている価値観、例えば、自然の進歩へ間違った楽観的信仰、進化の力は単なる外的な状況への受身的な適応であるという信仰に向けられた。より高い生（力）ではなく、生き残ることが発展の尺度、原動力であるという信仰にも批判が向けられた。しかし、このような批判をしながらも、ニーチェはダーウィニズム一般を真実とみなし、科学的発見と考えた。

自由意志と必然性は明らかに相反する矛盾するものに見えるが、パースペクティブ主義の考えからすれば、それぞれが絶対化されてはいけないう一つの解釈であり、また物事の多面性に対応した見方である。自由意志と必然性の考えは矛盾するものとしてではなく、両立するものとして捉えることが可能である。つまり人間は自由に行動していると同時に必然的に行動させられているのである。人間は自発的、内発的に行動しているように見えながら、内部にある欲望、衝動に動かされている、そして同時に当然のことながら、外部にも影響を受けている。

3. 芸術（仮象、虚構）と学問（真理認識）

ニーチェの芸術と学問に対する見方もそれぞれ、肯定、否定の二律背反の構造を示している。ニーチェにとって芸術は仮象、美、虚偽を代表するものであり、学問は真理を論理的に認識しようとするものとみなされている。『悲劇の誕生』ではソクラテスに代表される真理追究、学問を批判し、ワーグナーに代表される芸術を擁護している。芸術は美しい仮象、幻想として矛盾、恐怖、苦悩に満ちた不合理で意味のない混沌とした現実世界に秩序、形式、美、意味を与え、我々の実存を耐えられるものにする。

「美的現象として世界は依然として耐えられる」¹⁰⁾

しかし、その後、『人間のあまりに人間的』では学問の真理追究、認識の立場から芸術は単なる仮象、虚偽として批判されるようになる。

「目立たない真理の評価——厳密な方法で見つけられたささやかな目立たない真理を形而上学的、芸術的時代や人間から生じ、人を喜ばせ、眩惑する迷妄よりも高く評価することはより高い文化の目じるしである」¹¹⁾

ニーチェ自身が文献学者であったこと、また哲学者であることを考えれば、当然、ニーチェは真理追求者であり、学問、認識の立場にいたことは明白である。他方、ニーチェが詩作や、ワーグナーに捧げた『悲劇の誕生』を書き、『ツァラトゥストラ』を創作したことを考慮するならば、芸術家と言えないにしても、芸術を高く評価してことも確かである。芸術はいずれにせよ、「生」という観点から肯定されているのである。ニーチェによれば、「生」を成り立たせているものは仮象、誤謬、虚偽、幻想であり、そもそもパースペクティブ主義の観点により、世界の真実は捉えることは出来ず、我々は仮象、誤謬の世界から逃れることは出来ない。また誤謬、思い込み、幻想が我々の生の根本構造である限り、それを取り除くことは「生」に有害である。恋愛相手の偶像化など我々は現実の真の姿を見ようとするよりも、そうであって欲しい現実を求め、情熱にとらえられることを望んでいるのである。

「ありそうであり、ありそうでもないこと——ある女性がひそかにある男性を愛し、彼を自分自身よりもずっと上の存在とみなし、ひそかに何度も自らに言った。〈あのような方が私を愛してくれたら、それこそ身を滅ぼしてもいいほどの恩寵でしょう〉。男性の方にも女性と全く、同じことが起こり、心ひそかにまったく同じ考えを抱いていた。ついにあるとき二人の固い口がほぐれ、お互いに心のひそかな思いを奥の奥まで打ち明けた時、沈黙といくばくかの思慮が生まれた。それから女性が冷たい声で言い始めた。〈まったくはっきりしました。私たちは二人とも、私たちが愛したと思っていた者とは違ったものです。もしあなたが自分でおっしゃるところの者で、それ以上の者でないなら、私はいたずらに身を卑しめてあなたを愛したのです。悪魔があなたと同様に私を誘惑したのです〉。——こうしたきわめてありそうな話が決して起こらない、——なぜだろう？」¹²⁾

恋愛の初めにおいてはそれぞれが相手を偶像化、美化し、恋の情熱、幻想にとらわれ、相手を冷静に認識しようとはしない。相手を美化することが幻想であってもそれは幸福であり、「生」の喜びをもたらすがゆえに相手の本当の姿を認識することより、優先されるのである。人間は真実を知ることよりも幻想、仮象の世界に留まっていたいのである。また真実は結局、知ることが出来ない限り、そうならざるを得ないのである。実際の世界、人間の現実には矛盾に満ちたものであり、不合理で、意味がなく、醜悪で残酷であるがゆえにそれを覆う芸術の美、仮象の世界が必要である。この仮象、自己欺瞞、幻想は生に不可欠であり、それから逃れることもできないのである。真理（現実）を認識しようとする学問的意志と仮象幻想にとどまろうとする芸術的意志も矛盾するように見えるが、これもニーチェのパースペクティブ主義の考えの表れであり、人間、現実の多面性、多様性に対応している。

4. 力への意志；自己顕示、他者支配と自己超克

ニーチェは生物存在のみならず、存在一般を動かしている原理として「力への意志」を考えた。パースペクティブ主義の観点からすれば、「力への意志」も一つの解釈にすぎないがニーチェ自身

は「力への意志」で世界を究極的に説明しようとした。人間のすべての行動は唯一の衝動から生まれてくるのであり、この衝動が力への欲求なのである。人間はただ生きるのではなく、また単なる自己保存ではなく、生きて自分の力を感じたいのである。すでに持っているもの（生）を望むのではなく、それを越えたものを望むのである。

「生そのものは本質的に他者や弱者を自分のものにすることであり、傷つけることであり、圧倒することであり、抑圧、非情さであり、自分の形式を他者に強要することであり、併合であり、少なくとも、最も穏かに見ても搾取である。」¹³⁾

人間の行動は最終的には自己本位、エゴイズム、虚栄心、自己欺瞞、自己陶醉、他者支配、他者への優越意識に還元される。自己犠牲に見える行為も自己愛、虚栄心に還元され、愛も他者支配、所有の問題として分析される。同情も優越感と関係づけられる。社会的に賞賛され、善と認められている行為は決して人間的に素晴らしいものではなく、単なる自己中心の「力への意志」の表れであることが暴露される。「力への意志」は主に他者に対して向けられるが、ニーチェは自己否定のように見える振舞いの中にも「力への意志」を見ようとした。

「ルカ伝 18章 14の訂正 — 自分をさげすむ人は高められることを望んでいるのだ。」¹⁴⁾

聖書の原文は「おれをさげすむ人間は高められる。」である。キリスト教倫理では人間の傲慢さ、尊大さが否定され、自己犠牲、自己否定、隣人愛が求められる。ニーチェはここで自己卑下のキリスト教倫理を批判し、「高められる」を「高められることを望んでいるのだ」に変え、自己卑下の底に隠れている自己愛、「力への意志」を敏感に感じ取る。自分を卑下することは自己を貶め、否定するのではなく、自己卑下を通して自分の謙虚さを顕示しようとしている意志を暴露する。徹底した暴露心理学である。母親の子供に対する愛、兵士の祖国への愛などの自己犠牲的行為についても自己を二分化する利己的な行為として分析している¹⁵⁾。

「力への意志」は最終的に自己の絶対化、自己の力の顕示、他者支配、弱者の否定、強者の肯定を含んでいる。ニーチェは「力への意志」の思想を通して人間をほとんどネガティブにとらえているが、しかし、人間の自己本位の行動を否定し、それを乗り越えようとする考えも見出される。

「感謝 — 繊細な心の人には誰かが自分に感謝する義務があると思うと重苦しく感じる。粗野な心の人には自分が誰かに感謝しなければならないと思うと重苦しく感じる。」¹⁶⁾

人間は自分が誰かに恩義があるとき、恩を返さなければいけないと感じるのが普通であるが、他方、他者が自分に恩義がある場合は、他者が自分に恩義を感じて恩を返してくれることを望むか、あるいはそのことを気にしない。そのことで他者に心の負担をかけていることまでは心配しない。ここでは人間が自己中心的に物を考えることが粗野な感じ方であり、他者を中心に物を考えることの繊細さが肯定されている。この考えはニーチェの力への意志の考えと正反対である。

「そもそも人をほめる場合に自分と一致しない所を常に賞賛するとすれば、それは洗練されていると同時に高貴な自己抑制である。その他の場合には、自分自らを賞賛していることになり、それは良き趣味に反するものである。」¹⁷⁾

ここでニーチェが言いたいことは一般的に人が他人をほめるとき、自分とは違った人間をほめるよりも、自分と似た人間をほめるケースが多く、それは結局、自分をほめることに、つまり自画自賛になるということである。それ故に他者の中の自分ないものをほめることこそ、良き趣味であるということである。この考えもまた自己中心的「力の意志」の否定と言えらる。他者は自分と同じタイプの人間であるから、賞賛するのではなく、自分と異なったものであるからこそ、賞賛されるべきなのである。ここで他者は自己中心的にとらえられ、いわば、同化され、支配される存在ではなく、あくまで距離をもって対等の視点から見られる異なった存在である。ニーチェは愛を所有欲、思い上がり、エゴイズムと断罪し、なぜ愛は賞賛され、神聖視されるのかと疑問を投げかけているが¹⁸⁾、しかし、同時に愛に対して相反する考えも見出される。

「愛と対立性——愛とは、他者が我々とは違って対立的な形で生き、活動し、感じていることを理解し、喜ぶ以外の何であろう。愛は喜びによってこの対立に橋を架けるために、この対立を否定し、取り除こうとしてはいけない。」¹⁹⁾

他者と自分が一体化し、いわば、他者を自分に従属させ、自分のものにするような愛ではなく、他者はあくまで他者であり、自分とは違った存在であることを望むような愛である。ニーチェは愛よりも友情を高く評価しているが、これは愛が他者支配になりがちであるが、友情は同等な関係に基づいているからであろう。

他者を自分に従属させ、同化させ、自分を優位な立場に置くことが「力の意志」であり、それが生の現実であるが、しかし、このように自己本位の力の意志を否定し、他者本位の考えも見出される。人間は弱さ、尊大、粗野、虚栄心、自己欺瞞、利己的愛、同情、嫉妬にとらわれた不完全で醜悪な存在としてネガティブに捉えられるが、他方、それを超克する強さ、偉大さ、高貴さ、繊細さが対置されている。他者に対する敬意、距離、繊細さ、洗練、自己抑制が求められている。この自己を超えようとする意志は超人思想に通じるものであり、この意志も「力の意志」の表れとみなすことができるが、しかし、この自己超克は他者支配などネガティブな意味での「力の意志」の否定であり、力の意志に相反する考えである。

5. ま と め

現実、世界の認識は単なる解釈にすぎないというパースペクティブ主義の考えと世界を絶対的世界観（力への意志、永劫回帰）で根拠づけようとする試み、また、世界や現実は必然的であるとみなす考えとより高貴なもの（超人）へと向かう自由意志の肯定、さらに真理の認識を求める意志と虚偽、仮象にとどまろうとする意志（とどまらざるを得ない必然性）、また、生は結局、他者支配としての力への意志の発現であるであると認めながらも、力の意志の否定、これらはすべてニーチェの哲学全体を貫く矛盾性、二律背反であるとしても、それは決してお互いを排除しあうものではなく、それぞれが真実であり、事実であり、現実の多面性に対応していると言えらる。人間は生きる上で何か確実なもの、不変で絶対的なものを求めるが、しかし、それは結局、

誤謬、思い込み、単なる主観的解釈にならざるを得ない。また人間は自発的に意志を持って何かを求めるがそれも何かに必然的に動かされている。人間は真理、事実を認識しようとする意志があると同時にそこから目をそむけ、仮象、幻想の中にとどまっていたいというのも事実である。人間は他者より優れ、他者を支配し、自分の力を誇示したいと思うと同時にそういう自分を抑制し、超克する意志も否定出来ない。

人間や世界自体が様々に相反する側面を持っている限り、その認識も相反する矛盾するものになる。その意味においてニーチェ哲学の様々な矛盾、不合理性は論難されるものではなく、世界や人間の矛盾、非合理性の反映であると言えるのである。

注

ニーチェの著作からの引用はすべて Friedrich Nietzsche, Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe, hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Berlin/New York: dtv. 1980 (KSA)による。

- 1) Vgl. Pütz Peter: Friedrich Nietzsche. Stuttgart 1975. S. 22f.
- 2) KSA, Band 2, S. 387.
- 3) Vgl. KSA, Band 3, S. 626.
- 4) Vgl. KSA, Band 3, S. 468.
- 5) KSA, Band 2, S. 274f.
- 6) Nietzsche-Lexikon, Herausgegeben von Christian Niemeyer, Darmstadt, 2009, S. 266f.
- 7) KSA, Band 2, S. 103.
- 8) Vgl. Nietzsche-Handbuch, Hennig Ottmann (Hrsg), Stuttgart • Weimar, 2000, S. 212f.
- 9) ebd., S. 406.
- 10) KSA, Band 3, S. 464.
- 11) KSA, Band 2, S. 25.
- 12) KSA, Band 3, S. 247.
- 13) KSA, Band 5, S. 207.
- 14) KSA, Band 2, S. 87.
- 15) KSA, Band 2, S. 76.
- 16) KSA, Band 2, S. 246.
- 17) KSA, Band 5, S. 231.
- 18) Vgl. KSA, Band 3, S. 386f.
- 19) KSA, Band 2, S. 408.